

第六部 スピリチュアル・ライフと倫理

□ 「スピリチュアル・ライフ（霊的な生き方）」に関する学び全体・・・8つのテーマ

- 第一部 聖書が示すスピリチュアル・ライフとは何か（定義）
- 第二部 スピリチュアル・ライフと 信者の生活ルール
- 第三部 スピリチュアル・ライフと 聖霊
- 第四部 スピリチュアル・ライフと 交わり
- 第五部 スピリチュアル・ライフと 弟子
- 第六部 スピリチュアル・ライフと 倫理
- 第七部 スピリチュアル・ライフと 神の導き
- 第八部 スピリチュアル・ライフと 霊的戦い

□ 「スピリチュアル・ライフと倫理」のテーマで扱う5つの大項目

- I. 生まれながらの人の倫理の実態と神の義
- II. 信者と律法の関係
- III. 新約聖書の倫理
- IV. よく質問される問題
- V. 借金をすることについて

I. 生まれながらの人の倫理の実態と神の義

□アウトライン

- 1. 生まれながらの人の倫理の実態
- 2. 神の義
 - (1) 人の義は神を満足させるのには不十分である
 - (2) 人の義は肉（血筋や体の行い）に頼るが、神の義は信仰によって与えられる
 - (3) 神の義と不信者との関係
 - (4) 神の義と信者との関係

1. 生まれながらの人の倫理の実態

ロマ 3 : 9~12

では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。次のように書いてあるとおりです。

「義人はいない。一人もいない。悟る者はいない。神を求める者はいない。すべての者が離れて行き、だれもかれも無用な者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。」

この箇所は、信仰を持つ前の、生まれながらの人が、どういう倫理的状态にあるかを示している。

ユダヤ人であるパウロは次のように語っている。

「私たちにすぐれたところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。次のように書いてあるとおりです。」

ユダヤ人は、ヘブル語聖書（旧約聖書）の民である。モーセを通して神から与えられた律法を持つユダヤ人は、異邦人とは違う、というのが、当時のユダヤ人たちの理解であった。パウロは、ユダヤ人も異邦人も、すべての人が罪の下にあつて、その点では違いはない、と述べた上で、次のように旧約聖書の詩篇や伝道者の書を引用する。

「義人はいない。一人もいない。悟る者はいない。神を求める者はいない。すべての者が離れて行き、だれもかれも無用な者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。」

最初の人アダムの墮落以来、人の内側には罪の性質が入り込んでいて、人の霊・魂・心・思考・意志・良心、これら6つの要素すべてに深刻な影響を及ぼしている。そのため、すべての人は悪に向かう傾向を持つ。そして、神の前に立つとき、神から義人であると認めてもらえるほど、清く正しい人は、誰もいない。

生まれながらの人は、すべての人が、例外なく、罪の下にあり、神の前においては、義人ではない。神学では、この倫理的状态を、「全的墮落」という。

「全的墮落」の意味をもう少し具体的に理解するために、【〇〇という意味ではない】という説明を、次に4つ挙げる。

(1) 【信仰を持たない人は善悪の区別が全くできない】 という意味ではない

信仰を持たない、生まれながらの人でも、善悪の概念は持っている。

ロマ 2 : 14~15 *律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じることを行う場合は、律法を持たなくても、彼ら自身が自分に対する律法なのです。彼らは、律法の命じる行いが自分の心に記されていることを示しています。彼らの良心も証ししていて、彼らの心の思いは互いに責め合ったり、また弁明し合ったりするのです。*

(2) 【すべての人が一様に完全に罪深い】 という意味ではない

人は墮落しているといっても、造られたときの神の似姿としてのかたちをまだ、いくぶんなりとも持っている。

ヤコブ 3 : 9 *私たちは、舌で、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌で、神の似姿に造られた人間を呪います。*

そして、罪深さの点では人によって個人差がある。また、同じ人でも、より悪くなることもある。

Ⅱテモ 3 : 13 *悪い者たちや詐欺師たちは、だましたり、だまされたりして、ますます悪に落ちて行きます。*

(3) 【人はすべてのタイプの罪を犯す】 という意味ではない

具体的にいろいろなタイプの罪がある。一人の人が、すべてのタイプの罪を犯すわけではない。たとえば、律法学者やパリサイ人たちは、イエスから偽善者と責められたが、十分の一をささげる点ではきちんとしていた。当時はモーセの律法が有効だった時代なので、イエスはその点もおろそかにしてはいけない、と言われた。

マタイ 23 : 23 *わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、ミント、イノンド、クミンの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならないことだ。*

(4) 【信仰によって新生しない限り人は良い事は何もできない】という意味ではない

新生していない人であっても、なにがしかの良いことを行うことはできる。
マタイ 19 : 16~22 に登場する青年の例を見てみよう。

すると見よ、一人の人がイエスに近づいて来て言った。

「先生、永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。」イエスは、彼に言われた。「なぜ、良いことをについて、わたしに尋ねるのですか。良い方はおひとりです。いのちに入りたと思うなら戒めを守りなさい。」彼は「どの戒めですか」と言った。そこでイエスは答えられた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」

この青年はイエスに言った。「私はそれらすべてを守ってきました。何がまだ欠けているのでしょうか。」イエスは彼に言われた。「完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つこととなります。そのうえで、わたしに従ってきなさい。」

青年はこのことばを聞くと、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである。

青年は、十戒の中のいくつかの規定を示されると、「私はそれらすべてを守ってきました」と答えた。イエスは青年のその答えを否定しなかった。確かにその青年はそれらの規定については守ってきたのである。

では、ロマ 3 : 12 「善を行う者はいない。だれ一人いない。」、これはどういう意味か？

ローマ人への手紙が教えているのは、神の前に出て【無罪＝義人である】と認めもらえるほどの善を行う者は、誰一人いない、ということである。人は、なにがしかの良い事を行うことはできる。しかし、誰も、永遠のいのちにふさわしい善を行うことはできない。

イエスは、青年に「完全になりたいのなら」と言って、その道を指し示した。青年の問題は、自分の行いで永遠のいのちを得られると思っていたこと、そして神に拠り頼まずに、財産の上に自分の人生を建てていたことである。その彼にイエスは、財産を売り払って貧しい人たちに与え、自分について来るように招いた。イエスについて行く先で与えられるのは、神の義である。永遠のいのちを受けるに値する完全な義である。それは人の行いや長所によらず、恵み、無代価で与えられる神の義である。

では、その神の義について、次に見てみよう。

2. 神の義

- (1) 人の義は、神を満足させるのには不十分である

イザヤ 64 : 6 **私たちはみな、汚れた者のようになり、その義はみな、不潔な衣のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、その咎は風のように私たちを吹き上げます。**

- (2) 人の義は肉（血筋や体の行い）に頼るが、神の義は信仰を通して与えられる

ピリピ 3 : 4~9 ただし、私には、肉においても頼れるところがあります。ほかのだけれど肉に頼れると思うなら、私はそれ以上です。私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人（びと）、その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義については非難されるところがない者でした。しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。それは、私がキリストを得て、キリストにある者と認められるようになるためです。私は**律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち信仰に基づいて神から与えられる義を持つ**のです。

- (3) 神の義と不信者との関係

① 不信者は、二つの問題を抱えている

- まず、罪の問題。人は完全に墮落しているから、罪がその人の内側の6つの要素（霊・魂・心・思考・意志・良心）すべてに深刻な影響を及ぼしている。そのため、人は悪に傾く傾向があり、反倫理的な行動に引かれる。多少は良いことをできたとしても、それは人の義にすぎない。それは「**不潔な衣**」のようなものである。神の前に立って永遠のいのちにふさわしいと認められるものではない。
- 二つめは、神の義を持っていない、という問題。神の義がなければ、永遠のいのちは受けられない。

② 不信者にとって二つの問題の解決は、十字架にある

Ⅱコリ 5:21 **神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。**

- 不信者は、まず、罪の問題を解決する必要がある。「罪を知らない方」とは、イエス・キリストである。神は、生涯一度も罪を犯さなかったお方を、私たちの代わりに十字架につけた。イエス・キリストは私たちのすべての罪を背負ってくださった。人の罪はすべて十字架の上で贖われた。
- この贖いを自分のものとし、赦しを受ける道は、イエス・キリストが私たちの罪のために十字架の上で死んでくださり、墓に葬られ、三日目に復活したことを信じることである。その信仰によって、人は神の義を受け取る。この神の義は、イエス・キリストの義である。「罪を知らない方」の完全な義が、信じる者の上にかぶせられるのである。

(4) 神の義と信者との関係

- ① 信者は、信じた瞬間に、神の義を持つという地位を与えられた。これが救いであり、義認である。イエス・キリストの義が自分の上にかぶせられた。神の目からは、信者は、完全に聖い者、聖徒、正しい者、義人である。その内実は別にして、そのような地位をいただいたのである。
- ② 信者は、日々の生活の中で、「神の義によって行動するか、人の義を立てようとして行動するか」を、選択していくことになる。それを聖書は、「霊に従うか、肉に従うか」という表現をする。
 - たとえば、企業経営者としては当然の「ビジネス・センス（経営感覚）」に従って事業を行うとしたら、時には聖書に記されている神の命令に反することになる。そうすると、人の義においては良い事であっても、神の義に照らすと、反倫理的になる。
 - 神の義は、神のことばに示されている。神のことばに照らして、何が正しいのかを判断し、自分の言動を吟味する。間違ったら、Ⅰヨハネ 1:9 「罪を言い表す」祈りをする。信者にとって倫理的とは、神のことば、神の命令に従うことである。

聖書には、信者は律法から解放されたとある（ロマ 7:6 など）。なのに、私たちは神の命令に従わないといけないのか？ 次は、「Ⅱ. 信者と律法の関係」である。